

「わたしにの心にかなう者」

詩篇

マタイによる福音書

第2篇 7節～9節

第17章 1節～13節

岡村 恒 牧師

「これはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者である。これに聞け」。(マタイによる福音書 17章5節) 3人の弟子たちは雲の中から響くこの言葉を聞きました。主イエスは地上に来られた神の子です。全ての人の罪を負って十字架にかけられて死なれ、墓に葬られました。しかし神が、このお方を死人の中から、天にまで引き上げられました。世の終わりの日、再び地上に来られ、新しい天と地を完成なさいます。これらの話は聖霊が注がれなければ人間には理解できない話です。この日、山上で彼らが見たことも理解不能でした。

主イエスは3人の弟子を連れて山に登られました。そこで、この世の物でない出来事に遭遇しました。主イエスの衣の輝きは神の臨在の光そのものだったと聖書は記します。主イエスが一体どなたかを知って山から下ります。これはエルサレムの神殿に登る巡礼者と重ねられます。

私たちも、主イエスに礼拝の場所に導き出されました。主イエスがどなたかを知るためです。神に出会うという体験は、いつでも恐怖を呼び起こします。私たちは1人残らず神の前に立つことができない存在だからです。信仰によって主イエスに結び付けられなければ、どこまでも罪人であります。

神の前に立つと人間のあらゆる物が力を失います。この聖堂には十字架像も祭壇もありません。宗教改革の1つの考え方に、目に見える物は救いの役に立たないという考え方があります。目に見えない神の言葉だけが、そして聖霊がお与え下さる信仰だけが私たちを救い得ると信じているのです。

この日、3人は恐怖の中で、モーセとエリヤがそこに居ることを理解しました。神の約束と一体であることが目に見える姿であらわされました。エリヤは世の終わりに来る人です。弟子たちは世の終わりの徴(しるし)を目にしたと思いました。ですから幕屋を三つ建てて礼拝をしようと言いだしたのです。見当違いの話です。主イエスが望んでおられることは人間の力で神を崇めることではありませんでした。主イエスがいったいどなたかを正しく受け止め、信じることだったのです。ペテロの思い違いはもう1つありました。主イエスとモーセとエリヤを等しく扱ったことです。

主イエスの受難の話を聞いたとき、彼は主イ

エスの前に立ちはだかりました。自分が考える神の救いに合致しない主イエスの行動や言葉を否定しました。神の救いの計画を理解できないので、主イエスの前に立ちはだかり、邪魔をしようしました。

私たち信仰者は繰り返し神に従うことに失敗します。私たちも礼拝のたびに、あなたこそ主なるキリストですと告白をします。しかし直ぐに主イエスの前に立ちはだかります。自分が期待する救いとは違う救いがそこに示されるからです。しかし、「これはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者である」と主イエスに向かって神が言われた時、エリヤもモーセも消え失せて、主イエスお一人に集中していきます。

やがて死人の中から復活なさった主イエスは、天に昇っていかれました。私たちのために場所を用意し、再び来て、栄光の姿で、私たちを迎えてくださるためです。代々の教会は主イエスを真の贖(あがな)い主と呼んできました。贖うというのは、代償を払って買うという話です。神に裁かれ、滅ぶべき私たちを主イエスはその命をもって贖いとってくださったのです。

この時、弟子たちは1つの疑問を抱きました。「いったい、律法学者たちは、なぜ、エリヤが先に来るはずだと言っているのですか。」(17章10節) 主は、エリヤは既に来たと言われ、あのバプテスマのヨハネをお示しになりました。確かに、私こそ聖書に約束をされた終わりの日に来る救い主だとはっきり言われたのです。

聖霊が降り、私たちの心を開くとき、神の救いの計画が明らかになります。主イエスと同じく、「わたしの愛する子、わたしの心にかなう者である。」と、神が宣言をしてくださるのです。これは主イエスを信じる者に向かって父なる神がくり返し語ってくださっている宣言です。いつでも思い違いをし、失敗をし、主イエスの前に立ちはだかるような私たちを、神は愛し抜いてくださっています。

山上で主イエスのお姿は光のように白い姿に変わられました。終わりの日、主イエスは再び来られます。その時の姿がヨハネの黙示録に描かれています。人々が真白の衣を着て集められ、神をほめたたえている姿です。そして私たちはキリストと等しい栄光の姿に変えられます。

(記 説教要約奉仕者)